

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Trends in Studies of Tibeto Burman Languages in the Himalayan Region : Past and Present

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西, 義郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004084">https://doi.org/10.15021/00004084</a>

## ヒマラヤ地域のチベット・ビルマ系言語研究の動向

——回想と現状——

西 義 郎\*

### Trends in Studies of Tibeto-Burman Languages in the Himalayan Region: Past and Present

Yoshio Nishi

チベット語以外の、ヒマラヤ地域のチベット・ビルマ系言語、通称「ヒマラヤ諸語」の資料が収集、公刊されるようになるのは、19世紀中頃からであったが、多くの言語学者によってこれらの言語の本格的な現地調査が行われ、大量の信頼できる資料や論著が発表されるようになるのは、1960年代の終わりからである。筆者は、1985年から1991年にかけて、『三省堂言語学大辞典』に、インド西北部とネパールの、当時知られていたヒマラヤ諸語について、個々の言語の項目を書くと共に、ヒマラヤ諸語全体の分布、系統、研究の現状、言語特徴等を「ヒマラヤ諸語」の項目に概説した。本報告は、その当時のヒマラヤ諸語の研究状況を先ず振り返り、次いで1992年から現在に至るまでの目覚ましい言語研究の進展状況の包括的な報告を行ったものである。なお、この報告では、ヒマラヤ地域のチベット語方言の研究状況についても、ヒマラヤ諸語の一部とみなして概説してある。

Tibeto-Burman languages in the Himalayan region, the so-called 'Himalayan languages', have been studied since the middle of the last century. However, it was only towards the end of the present century that many trained linguists began field studies of the languages. Thanks to their efforts, a large amount of reliable information has been published.

From 1985 to 1991 the present author prepared all but a few of the entries on then-known Himalayan languages in the *Sanseido Encyclopaedia of Languages* (5 vols.) (Tokyo: Sanseido). I also added an

\* 神戸市外国語大学名誉教授、国立民族学博物館共同研究員

**Key Words :** Tibeto-Burman languages, Himalayan languages  
キーワード：チベット・ビルマ系言語、ヒマラヤ諸語

entry on ‘The Himalayan languages’, summarizing distribution, genetic classification, previous researchers and their work, and linguistic (typological) features.

In the present report, I simply list researchers and the languages they worked on up to 1991, and then review important advances that have been made or that are underway in the field of Himalayan languages since 1992. Recent studies on Tibetan dialects in the Himalayan region are also noted.

1 はじめに	2 ヒマラヤ地域のチベット・ビルマ系言語の研究
1.1 ヒマラヤ諸語の範囲	2.1 1991年まで
1.2 言語か方言か	2.2 1991年以降
1.3 言語の系統・祖語	3 結び——ヒマラヤ諸語研究の最近の傾向

## 1 はじめに

### 1.1 ヒマラヤ諸語の範囲

1980年代後半から1990年代初めにかけて、私は、『三省堂言語学大辞典』(1988-1993)に、ネワール語、カリン語(Khaling)、クルン語(Kulung)及びレプチャ語(Lepcha)を除いたヒマラヤ地域のチベット・ビルマ(Tibeto-Burman, 以下TB)系の諸言語、通称「ヒマラヤ諸語(Himalayan languages)」の諸項目の解説を書き、同時にそのもととなった幾つかの論文を発表した。上掲書では、編者の意図を汲み、Grierson(1909)の実際の編者であったSten Konowの用法に従って、「ブータンとインドのアッサム(Assam)地方以西のヒマラヤ山脈やその支脈に沿った山岳地帯の、チベット語方言を除いたチベット・ビルマ系言語」をヒマラヤ諸語と仮に定義して、1991年頃までに知られていたヒマラヤ地域のTB系言語について、個別言語及び当時一般に合意のあった下位語支(語系)について解説し、そのまとめとしてこれらの言語の[分布]、[研究の現状と資料]、[系統的分類]、[言語特徴]等を西(1992d: 505b-552a)に書いた。しかし、現在のように、インターネットを通じて研究者のホームページを読んだり、電子メールを用いて短時間で研究者と簡単に通信で

きなかったので、細部についての情報が得られず、曖昧なまま書かなければならなかった部分もあった。今振り返ってみると、『言語学大辞典』の諸項目（1988-1993）と、時間とスペースの都合でそこに書ききれなかった部分を纏めた西（1990, 1991）<sup>1)</sup>で、十全とは言えないまでも、1991年頃までのこの地域の TB 言語の分布、系統、概説、全体的な研究動向について、一応信頼できる解説を日本の研究者に提供できたと考えている。

1990年代に入って、TB 言語のヒマラヤ地域の概念は次第に拡大され、先ずブータンがこれに加わり、最近では、インドのアッサム地方やブータン以西の地域の言語までもヒマラヤ地域の言語として取り上げられる傾向にあるようである。これには、オランダの言語学者 George L. van Driem 及び彼を代表者とするライデン大学の Himalayan Languages Project, そして1995年以降毎年開催されている The Himalayan Languages Symposium (HLS)<sup>2)</sup> が大きく貢献している。また、西（1992d）で「ヒマラヤ諸語」を執筆した際に、チベット語方言の解説は、「チベット語」[方言]（西 1989b）の項目に別個に書いたが、当然、そこに挙げたチベット語方言の一部は、ヒマラヤ地域の TB 系言語に含まれるべきものである。従って、ここでは、多少拡大された意味での「ヒマラヤ諸語」と共に、以下に簡単に取り上げることにする。なお、西（1989b）は、それ以前に書いたチベット語方言に関する幾つかの論文、特に「現代チベット語方言の分類」（西 1986）をベースに書いたものである。

小稿は、2000年3月23日に石井溥教授（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）が主宰されたヒマラヤ研究会で発表した報告に加筆、修正を施したものである。当初、「ヒマラヤ地域の言語学の最近の動向」というテーマを与えられ、ヒマラヤ地域の言語と言えば大体が TB 系だからということで一応納得したが、ネパール語（Nepali）を始めとする TB 系以外のインド・アーリア系（Indo-Aryan）言語や方言もあることなので、誤解を避けるために TB 系と限定し、言語学とあったところも言語研究と改めさせてもらった。1991年代までにも、既に個々の文法現象を取り上げ、TB 言語全体を視野に入れた類型的研究やその現象の歴史的起源に関わる研究がある程度あったが、この地域の言語学的研究は、将来はともかく、現在もまだ個別言語の音韻、文法の記述や語彙の収集が主体であるという理由からである。現在、文法素描や参照文法が出版された TB 言語や、調査中ではあるが既にその言語の文法の一部が論文として発表されている TB 言語の数は、10年前とは比較にならない程に増えており、その資料を利用して、そのような研究が今後次第に増えてくることが予想される。以下、本論に入る前に、言語の分布、系統、分類を論ずる際に前提となっ

ていることを幾つか簡単に説明しておく。

## 1.2 言語か方言か

西(1990)の2.1では、当時知られていた「ヒマラヤ諸語」(西北インドからブータンの国境までのチベット語以外のTB言語)の数を仮に71種としておいた。同時に、ある言語を「○○語」と呼ぶか、「○○方言」と呼ぶかは、通常、社会文化的な背景で決められており、それが言語学的基準に従った場合と必ずしも一致しないことを指摘して、そこでは、Gerd Hansson(1988)の分類に従った東ネパールのいわゆる Rai-Limbu 系、Rai 系、あるいは Kiranti 系と呼ばれる言語以外は、実際は言語学的というより、社会文化的な慣用に従ったものであると述べた<sup>3)</sup>。

社会言語学の概論書で屢々例として挙げられることであるが、たとえば、セルビア語とクロアチア語は、語彙や文法に多少の違いはあっても、言語学的に見れば、同じ言語と見なせるので、一般にセルボ・クロアチア語と呼ばれている。つまり、同じ言語の異なる方言とすることができる。しかし、この2言語の話し手は、自分達の言語は互いに異なると主張するだろう。この背景には、かつてクロアチアはハプスブルク帝国の支配下にあり、一方、セルビアはトルコ帝国の支配下にあったという歴史があり、その結果、クロアチアでは、宗教は西方教会(カトリック)に属し、文字もローマ字を使用するが、セルビアでは、東方教会(セルビア正教)を信奉し、文字もキリル文字を採用するようになった。この歴史はその他の点でも両者の社会的、文化的差異をもたらし、互いに民族として異なる identity を持つようになり、自分達の言語は別個の言語であると主張するに至ったと考えられている。両者は第2次大戦後ユーゴスラビアに統合されるが、この意識は維持され、共産主義政権の崩壊と共にクロアチアはユーゴスラビアから分離独立することになる。このような例は数多くあり、オーストラリアのアボリジンやパプア・ニューギニアの言語でも、ほんの僅かな語彙が異なるだけでそれぞれが別の言語であると主張されている例が数多く報告されている。ネパールの例では、東ネパールのホンゴコラ川(Hongu Khola)流域で話されている Kulung 語と Sotang 語は、言語学的基準に照らすと、同じ言語の方言と見なすことができるそうだが、Sotang 語の話し手は、自分達は Kulung 語とは別の言語を話すと主張すると言う。同様に、西北インドのヒマチャルプラデシュ州(Himachal Pradesh)のラホールスピティ(Lahaul-Spiti)地方のチャンドラ(Chandra)川北岸に沿った地域で隣り合って話されている Tinan 語と Ranglo 語は、実質的に同じ言語の方言と見なせるが、土地の人達は別の言語だとしている。

逆に、中国では、たとえば、現在の北京方言と広州方言は互いに疎通しないが、それでもその話し手はいずれも中国語を話していると主張するだろう。この場合は、共通の歴史、文化を持っているという意識と共通の文字（文語）を使用するという認識が働いていると思われる。しかし、言語学的基準に従えば、両方言は別々の言語であると見なされることになる。この点は日本語でも同じで、現在は標準語あるいは共通語と呼ばれる「日本語」が日本全土を覆っているためつい見過ごしてしまいがちであるが、本土のことばと沖縄（琉球）のことば、あるいはその更に南の島々のことばが同じ言語であると言えるかどうかは、やはり言語学的基準に照らせば問題がある。ネパールの Kathmandu Newar 語、Dolakha Newar 語、Pahar 語はいずれも Newar 語の方言か、それとも別の言語かという問題も、社会文化的な立場に立つか、言語学的な立場に立つかで、答えが違ってくるだろう。因みに、T. R. Kansakar (1999) は、Kathmandu Newar 語の話し手が初めて Dolakha Newar 語を聞いた場合の相互可通率は40%以下であると述べている。

ここで言う言語学的基準には、①通常100語か200語の基礎語彙で同源語の共有率が81%~86%以上（人により数値が多少異なる）であれば、その2言語は、同じ言語の方言であるとされ、それ以下であれば、異なる言語であるとする語彙統計学（lexicostatistics）的基準と、②相互可通度（mutual understandability）テストでその2言語の可通率が70%~80%以上（これも人によって異なる）であれば、同じ言語の方言で、それ以下であれば異なる言語であるとする基準の2つがある。共有率の大小を計算する基準を利用すれば、言語の下位分類もできる。ネパールの TB 言語の場合、Warren W. Glover (1970) がこの方法でチベット語方言を含むネパールの36言語を分類している。②の方法でも、可通率の大小でやはり言語の下位分類が可能だと言える。Glover and John K. Landon (1980) は、この方法で Gurung 語の方言区分（区劃）を試みている。

この2種の方法には、いずれも問題があるが、①と②とでは得られた結果が必ずしも一致しない可能性がある。たとえば、Hansson (1988) によれば、Limbu 語の Chatthare 方言と他の諸方言の同源語共有率は85%~90%に上るが、相互に疎通しないようである。語彙統計学的方法は、元来、言語年代学（glottochronology）での基礎語彙に対する考え方、即ち言語の語彙には、たとえば身体名称の一部や極めて普遍的自然現象、動作、性状を表す語彙等、置き換えられ難い基礎（中核）語彙があるとする前提を受け継いでいる。この前提には以前から異論もあり、そもそも基礎語彙とは何かという点で必ずしも意見の一致が見られない。その上、同源語か否かの判定

は限られた語彙では決定できない場合があり、同源語と借用語との区別が難しかったり、言語学者の能力や経験によって結果が異なる可能性がある。たとえば、同じ語彙表 (Swadesh の100語表) で計算しても、Glover と私とでは、Tamang 系 (=Taman-gic) の3つの言語、Tamang 語、Gurung 語、Thakali 語の各対の同源語共有率の計算が一致しない。一方、②の方法では、当該地域の威信語 (prestige language) の話し手より非威信語の話し手の方が威信語の理解度が一般に高いと言えるので、可通度は必ずしも双方向的 (bilateral) ではないことが屢々見られる。また、テストの方法についても、いろいろな問題点を指摘できると思うが、現在では②の方法がより妥当とされている。

言語の識別の問題で、私にとって興味深いと思われるネパールの言語の例を1つ挙げておく。

周知の通り、ネパールの少数民族の中で、最も多くの人類学者が研究対象として取り上げた民族は Thakali である。その言語は一般に Thakali 語と呼ばれる一方、同じく Thakali であると主張する Marpha の人々がかつては Thakali 語で Puntan と自称しており、「正統」Thakali の人々も彼らをそのように呼んでいたようだが、彼らは外国人や土地の者でないネパール人には Thakali を自称していたようである。西 (1990: 287 n.26) にも触れておいたが、31年前に初めてネパールを訪れた際に、当時の「正統」Thakali の長老であった Indraman Sherchan 氏の経営する Lali Guras というホテルに滞在していた時のことだが、そのホテルで働いていた Marpha の Hirachan 氏族の若者にたまたま彼の話す言語名を尋ねたところ、彼は Thakali 語を話すと言った。後で Sherchan 氏と会った際に、確認のため尋ねたところ、彼が色をなして否定したので、私の方が驚いた経験があった。当時の Thakali の人達は、Marpha や Syang, Thin, Cimeng (=Chimeng) (彼らも外部の人には Thakali を自称するが、それ以外の人、つまり Thak Khola に詳しい人には, Pacgauli, Syangtani, Thinnel, C(h)imtani と自称するそうである) の人達に対して政治的、経済的、社会的に優位にあり、決して彼らが自分達と同じ民族であると認めようとはせず、Thakali の呼称は自分達だけの民族名、言語名であると主張しており、社会的に劣位に立っていた人達に実質的にそれを容認させていたと言えよう。最近になって事情が変わり、Marpha や Pacgau の人達の社会的、経済的地位が高くなってくると共に、「正統」Thakali 以外の人達も、自分達が Thakali だと強く主張するようになってきているようである。人類学者の間でも、この点については意見の一致がなかったようである。Michael Vinding (1998)<sup>4)</sup>によれば、彼は、1970年代に彼らも含めて Thakali と認め、

「正統」Thakali, Puntan, Pacgauli をそれぞれ Tamang Thakali, Mawatan Thakali, Yhulkasompaimhi Thakali と呼称するように提案し、現在ではそれが人類学者の間で一般に認められていると述べているが、これに Thak Khola の住民の全て、特にかつての「正統」Thakali の人々が納得したわけではない。従って、社会文化的基準に照らして、あるいは社会通念的な基準に照らして考えた場合、どの言語を、あるいは全部の言語を、Thakali 語と呼んでよいのか、今でもはっきりしない。ただし、言語学者も、現在では、Tamang Thakali, Mawatan Thakali, Yhulkasompaimhi Thakali の言語はいずれも Thakali 語の方言であるとしているようである。音韻変化から見ると、Tamang Thakali「方言」は、Mawatan Thakali「方言」及び Yhulkasompaimhi Thakali「方言」とはっきり異なった点が認められ、どのような根拠でこの3言語が同じ言語の方言であると決めたのか、私にははっきりしない。この3つの「方言」の中では、Mawatan Thakali「方言」と Yhulkasompaimhi「方言」は明らかにより近い関係にあると思われる（言語か方言かの問題はさておいて、この結論は S. Georg (1996) の分類とも一致する）。この3つの「方言」のような場合、少なくとも Tamang Thakali「方言」以外の話し手は以前から自分の方言と Tamang Thakali「方言」の2言語併用者 (bilingual) であることが予測され、現在では Tamang Thakali「方言」の話者の多くも同様である可能性があるため、恐らく相互可通度テストの結果は歪なものになる可能性が考えられる。同じように、Gurung 語域の東端に位置する Gorkha 郡の Ghale 語域では、住民の大多数は Ghale 族でなく、Ghale 語を母語とする Gurung 族である。このような環境で、しかも、隣接する Gurung 語がこの地方では威信語であることから、この地域の住民、特に成人男性の多くが Ghale 語と Gurung 語の2言語話者であることが推測される。事実、1981年にこの地域を訪れた際に、何人かの人に尋ねたところ、Ghale 語と Gurung 語は同じ言語だと主張していた。実際は、この2つの言語は全く異なる言語である。従って、この相互可通度を調べる際には、被調査者の言語レポーターを予め知っておく必要があるが、もしある言語社会 (speech community) の話し手全体が母語、第2言語共に習熟度の高い2言語使用者 (bilingual) であれば、相互可通度テストが果たしてどの程度有効か問題であろう。このような事態は、ヒマラヤ地域の多くの言語社会で、現在は勿論、今後はそれ以上に予測される事態であると思う。

ヒマラヤ地域の言語の場合、全ての言語についてこれらの点が厳密に検討された上で、「〇〇語」あるいは「〇〇方言」と区別されているわけではないので、現在「〇〇語」と呼ばれているものが将来「〇〇方言」と呼ばれるようになる可能性や逆の可



能性のあるケースが含まれていると言える。1991年の時点で「ヒマラヤ諸語」は71種あるがこの数は流動的であると私は述べたが、数値が流動的であるというのは、その後発見される言語が含まれていないというだけでなく、多くの場合に上に述べたような言語学的基準で厳密に言語か方言かの判定がなされていないからでもある<sup>5)</sup>。

### 1.3 言語の系統・祖語

最近では、言語学以外の分野の専門家の中でも、言語学が単に言語と言語の系統や分類、あるいはその歴史的研究を主要テーマとするものであると誤解している人はそれ程いないと思う。確かに、言語学と他の幾つかの分野との接点として、言語の系統は無視できない。しかし、留意すべきは、多くの学者による長年にわたる研究の歴史と豊富な文献に裏付けられたインド・ヨーロッパ語族 (Indo-European Family) の場合でも未だに多くの問題を抱えているということと、最近では、そのインド・ヨーロッパ系言語の歴史的研究の副産物であり、唯一の確実な祖語 (proto-language) の復元方法とされてきた比較方法 (comparative method) が世界の全ての地域の言語に適用できるか否か疑わしいと考える言語学者が増えてきていることである。更に、祖語の概念についても、比較方法が前提とするような、均質的な単一言語であると常に仮定できるかどうか疑問がある。人類学者には馴染み深いことだと思いが、ある社会の文化要素を考える際に、それが拡散 (diffusion) によってその社会に取り入れられた可能性を常に考えなくてはならないのと同様に、言語要素の場合も、拡散の可能性を考えなくてはならないことと関わりがある。勿論、歴史言語学でも、拡散の概念は非常に古くから考慮されていたことだが、最近の言語類型論 (language typology) 的研究の進展がそれに一層拍車をかけたのではないかと思われる。また、言語の系統的分類についても、ある言語がどの語族に属するか、つまり、同系かどうかといったことは、たとえば、インド・ヨーロッパ系とかオーストロネシア系 (Austronesian) 等の、伝統的な比較方法がうまく、あるいは比較的うまく適用できる幾つかの確立された語族では、多くの場合に合意があるが、世界の言語には、このレベルの分類さえもはっきりしない言語が数多くあることを知っておく必要がある。また、既に確立された語族を更に大語族にまとめようとする試みが古くから行われてきたが、このような大語族にはほとんど信頼できる根拠がなく、言語学者でそのような分類を受け入れる者は多分それ程多くないのではないかと思う。同じように、同じ語族の言語の下位分類についても、ある程度の合意が得られている場合もあるが、TB系言語のように比較的に研究の歴史が浅く、その上、歴史的比較研究に従事する学者が今でも数える程

しかいない分野では、一部の低位語群を除けば、全体的な合意はない。低位分類には、上位から低位まで更に多くのレベルでの分類、つまり、それだけの数の中間段階の祖語の指定が行われるが、たとえ上位のレベルの分類について一般に受け入れられても、それより低いレベルの分類が一致しない例が屢々見られるし、その逆も同様である。これには、正統的分類法に従っても、分類基準として言語特徴を選択する際に常に恣意性が入り込む余地があるということもその一因と言える。

ここで正統的分類法に従えば、言語と言語が同系か否かは、仮定されたそれらの言語の祖語に帰属でき、しかもそれが拡散によってもたらされたものでないと確信できる言語特徴、音韻的、文法的、語彙的特徴を共有しているか否かで決定される。特に、同源語（根）と認められた形式間に規則的対応（regular correspondences）が立てられるか否かが重要な決め手となる。同系言語の低位分類では、同じ低位語群の複数の言語が、他の言語と祖語から受け継がれたものでない言語特徴を共有しているか否かが基準となる。勿論、この場合も問題の言語特徴が拡散による借用でないことを明らかにしておくことが必要であるが、それに加えて、同系言語の場合、その語族の祖語、あるいは低位語群の祖語から変化の傾向を受け継ぐことがあることも考慮に入れる必要がある。このような傾向（駆流 [drift]）が言語に必然的に内在するか否かはまだ証明されてはいないが、そう考えざるを得ない例が TB 言語の場合も含めてこれまでに数多く指摘されている。言語学では、同系論で基準となるような共有された言語特徴は *shared retention*、低位分類で問題となる共有された特徴は *shared innovation* と呼ばれている。勿論、問題となる言語特徴からは、偶然の一致や言語普遍（的特徴）（*language universal*）のようなものも排除されなくてはならない。歴史的研究がまだ十分に進展していない語族や語派の場合、ある言語特徴が、*shared retention*、つまり祖語から受け継いだ特徴なのか、*shared innovation* なのかははっきりしないことがある。TB 系言語、特にヒマラヤ地域の大多数の言語に見られ、TB 研究の分野では伝統的に動詞の代名詞化（*verb pronominalization*）と呼ばれる、動詞の人称・数の一致体系が TB 祖語、あるいはその上の段階として仮定されているシナ・チベット（漢蔵 / Sino-Tibetan, ST）祖語に遡る言語特徴の *shared retention* なのか、それとも TB 祖語から分裂した後に個別言語あるいは個別低位語群で発達した言語特徴の *shared innovation* なのかという問題は、チベット・ビルマ系という用語が確立された頃から既に議論の絶えなかった問題の一つであった。この問題についての論争は、西（1992d）の「言語特徴」の最後でかなり詳細に触れておいた。更に、その後の議論の展開については、西（1995）を参照されたい。

人文系の他の分野の多くの学者が歴史言語学に期待していることの1つは、恐らく祖語の年代や言語の分裂年代だろうと思うが、今も言語年代学 (glottochronology) を信奉している少数の言語学者を除けば、そのような年代の問題に歴史言語学が直接応えることができると考えている言語学者は先ずいないであろう。ただ、Tamang 系言語のように、復元できる祖語の音韻体系や語根の形式が現代 Tamang 語の幾つかの保守的な方言と極めて一致しているような場合には、この語群の祖語の年代 (time-depth) がそれ程古いものではないだろうといったことくらいは主張できると思う。上述のように、この言語年代学の副産物とも言える語彙統計学的方法を言語の下位分類に利用する人が今でもいる。この分類方法は、あまり調査が進んでいない地域の言語の系統を調べたり、暫定的に分類するには便利な方法と言えるが、既述のような欠陥がある上、この方法による分類は、歴史言語学本来の基準に基づく分類とは結果が必ずしも一致しない<sup>6)</sup>。

## 2. ヒマラヤ地域のチベット・ビルマ系言語の研究

### 2.1 1991年まで

上述のように、「ヒマラヤ諸語」の諸項目の執筆は1991年に実質的に終わり、その執筆に当たって参照した文献は、1960年代以前の古い文献を除けば、1960年代末から1970年代末にかけて Summer Institute of Linguistics (SIL) と Tribhuvan 大学の Institute of Nepal Studies (1972年に Institute of Nepal and Asian Studies, 1977年に現在の Centre for Nepal and Asian Studies, CNAS に改組) の共同プロジェクトとして Kenneth L. Pike, (Evertt) Austin Hale, Ronald L. Trail 等の指導で行われた「ネパールの言語調査 (Linguistic Survey of Nepal)」で公刊された論文や資料、それ以降に Hale (Newar 語), Ross C. Caughley (Chepang 語), Glover (Gurung 語), David E. Watters (Kham 語), Sueyoshi Toba (鳥羽季義) (Khaling 語) 等の SIL 関係の言語学者が個人的に継続した研究成果の論文や著書<sup>7)</sup>、1980年代に入り SIL の「ネパールの言語調査」を引き継いだ形で Deutsche Forschungsgemeinschaft の助成金で西ドイツの Kiel 大学とネパールの Tribhuvan 大学の共同プロジェクトとして Werner Winter, Alfons Weidert の指導で行われたネパールの東部開発地域の「ネパールの言語調査」の成果をこの地域の TB 系言語の系統的分類として集約した Hansson (1988) (改訂されて Hansson 1991) やこのプロジェクトの責任者であった Weidert による

Weidert-B. Subba (1985), また, 1960年代から1970年代にかけ個人的にネパールの TB 系言語の調査を行っていた欧米の学者, Nicholas J. Allen (Thulung 語) (彼は人類学者だが, 東ネパールの代名詞化言語 (pronominalized language) の纏まった文法を初めて書いた人物でもある), Richard Keith Sprigg (Limbu 語, Newar 語, Bantawa Rai 語, Lepcha 語, Balti チベット語), Boyd Michailovsky (Hayu 語, Bahing 語, Khaling 語, Limbu 語, その他の Kiranti 諸語, Dzongkha 語, Bumthang 語), Martine Mazaudon (Tamang 語, その他の Tamang 諸語, Dzongkha 語, Bumthang 語)<sup>補注</sup>, Ulrike Kölver (Newar 語) 等の論文と著書, 1980年代後半から精力的にネパールの言語の調査を始めた Carol Genetti (Dolaka Newar 語, Sunuwar 語; Nepali 語), van Driem (Limbu 語, Dumi 語, Baram [=Brahmu] 語, その他の Kiranti 諸語, Dzongkha 語, ブータンのその他の TB 諸語), Karen H. Ebert (Camling=Chamling 語, Athpare Rai 語, その他の Kiranti 諸語) 等の論文と著書, 1970年代末から1990年代初めにかけてネパールの TB 系言語を中心に TB 全体を視野に入れた様々な文法現象を典型的, 歴史的観点から論じた James J. Bauman, Scott DeLancey の論文, 1980年代初めに北村甫を代表として行われた日本の 'Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal' Project の成果である長野泰彦 (Syang 語, Manang 語, Nar 語), 星実千代 (Manang 語), 西義郎 (Ghale 語) の論文と資料, ネパール人の言語学者, Kamal Prakash Malla (Newar 語), Tej Ratna Kansakar (Newar 語), Novel Kishore Rai (Bantawa Rai 語), Subhadra Subba Dahal (Magar 語) 等の論文, 著書, 資料であった。一方, 西北インドの「ヒマラヤ諸語」の一部であるヒマラヤ語系 (Himalayish=West Himalayish) の言語の諸項目は, Claus P. Zoller (1983) の Rangpa 語 (=Rongpo) 以外は, Suhnu Ram Sharma から得られた資料と情報を加味しつつ, D. D. Sharma (Kinnaur/Kanaur 語, Manchad/Pattan 語) の記述文法, A. Gerard (Thebor/Tibarskad 語), Joseph Davey Cunningham (Thebor 語), Heinrich August Jäschke (Bunan 語), August Herman Francke (Manchad 語, Tinan 語, Bunan 語), Tika Ram Joshi (Kanaur 語), Thomas Grahame Bailey (Kanaur 語, Chitkal 語), LSI 等の1800年代中頃から1900年代初めまでの論文や著書を参考に, 必要に応じて彼らの記述に再分析や再解釈を加えて書いたものである。更に, 言語の分布については, David Snellgrove, Christoph von Fürer-Haimendorf, Dor Bahadur Bista, Bernard Pignède, Nareshwar Jang Gurung, Rishikeshab Raj Regmi, James F. Fisher, Ram P. Srivastava, N. J. Allen, Charles McDougal, Donald A. Messerschmidt, 飯島茂, 石井溥, 南真木人等の人類学者の論文や著書も

参考にした。

一方、ヒマラヤ地域のチベット語方言は、1950年代までは、Francke (Ladakhi 語), Alfred Frank Charles Read (Balti 語), Georges de Roerich (Lahul 語), Earnest Herbert Cooper Walsh (Tromo 方言=亜東方言)やLSI (NW インド, ネパール, シッキム, ブータンの幾つかの方言)等の論文や著書で僅かに知られていたに過ぎなかった。1960年代後半から1980年代にかけては、SIL の Anita Maibaum (Jirel 語), Esther Strahm (Jirel 語), Maria Hari (Kagate 語), Monika Höhlig (Kagate 語), Gorden H. Kent (Sherpa=Sharpa 語), Burkhard Schöttelndreyer (Sherpa 語), Olavi Vesalainen (Lhomi=Shingsapa 語)等の論文や著書、個人的に、あるいは何らかのプロジェクトに参加して調査を行った Sprigg (Balti 語), S. R. Sharma (Spiti 語), 長野 (Lo=Mustang, Kagbeni, Zharkot, Danggardzong の諸方言)及び星実千代 (Zanskar 方言), Roland Bielmeier (Kyirong 方言, Balti 方言) ('Tibetischen Erzählforschung' Project), K. Rangan (Balti 語, Purik 語), Sanyukta Koshal (Ladakhi 語)等の研究成果が論文あるいは著書として発表されて、充分とは言えないまでもヒマラヤ地域のチベット語方言の全体像がかなり明らかになっていた<sup>8)</sup>。

西 (1986) は、これらの方言資料を基にネパールのチベット語方言の分類を試みた。結論から言えば、いずれの方言もチベット側の中央方言 (Central/Ü-Tsang dialect) に分類できると思われるが、Kagate/Kyirong, Sherpa, Lhomi の諸方言には、中央方言には見られない際だった特徴があり、その他の方言にも中央方言とは異なる特徴がある程度認められることが問題を複雑にしている。言語学的基準に照らせば、共時的には、この3方言は Lhasa 方言等とは多分別の言語と見なすべきであろう。しかし、通時的 (歴史的) 見地からは、チベット語方言であると言える。

一方、Bielmeier は、当時既に蓄積されつつあった中国側のチベット語方言資料を全く考慮せずに、古い欧米学者の文献と自分で調査した僅かな方言に基づいて、Kyirong 方言 (ネパール側の Kagate 方言) 等を「Ladakh 方言の型とは幾分異なる西部過渡的方言に分類する必要がある」と述べ、西部方言に分類してしまった<sup>9)</sup>。彼の分類は、欧米の人類学者やチベット語を知らない一部の言語学者に受け入れられることになり、たとえば Vinding (1998) は、カリガンダキ (Kali Gandaki) 川上流域の Baragau 地方のチベット語方言を Western Tibetan dialect としている。

一方、ブータンのチベット語方言については、僅かに Dzongkha 語の幾つかの資料が公刊されたに過ぎなかった。私は、Dzongkha 語を通時的見地からチベット語の南部方言に暫定的に分類したが、西 (1986) の補注4) で述べたように、社会言語学

的視点からは、この言語は既にブータンの国語・公用語として認められているので、チベット語とは別の言語としなくてはならないであろう。また、奇妙に思われるかもしれないが、ブータンのチベット語諸方言も同じ立場からは **Dzongkha** 語の方言ということになるであろう。

『言語学大辞典』の項目の執筆に当たっては、当時としてはできる限りの資料を参考にして書いたつもりであるが、ヒマラヤ地域の TB 言語の研究は、絶えず進行していたので、ある項目を書き終えた後に、新しい資料を発見するとか、新しい資料が公刊されるといったようなことも屢々で、全ての項目について1991年までの情報を漏れなく取り入れることができたわけではなかった。

私が見落とした研究者の1人に Michael Noonan がいる<sup>10</sup>。彼は、米国で Chantyal (=Chantel) 語のインフォーマントと出会い、1989年からこの言語の調査を始め、この言語の浩瀚な辞書 (Noonan 1999) を編纂し、最近になってその文法素描 *The Chantyal language* (未刊) を書いている。また、1996年には、Nar-Phu 語 (Manang district) の調査を行い、その文法素描 *The Nar-Phu language* (未刊) も書いている。ここでは、1991年までのヒマラヤ地域の TB 言語研究について、これ以上立ち入らないが、上記のような遺漏が含まれていることを前提として、西 (1986, 1990, 1991, 1992d) の該当部分を参照して頂きたい。

## 2.2 1991年以降

1990年代に入ってからこの地域の TB 言語研究に見られる最初の大きな変化は、ブータン政府の要請を受けて、van Driem の指導で行われた「ブータンの言語調査 (Linguistic Survey of Bhutan)」の調査結果 (van Driem 1991a) が初めて報告されたことである。これによって、それまであまり知られていなかったブータンの TB 言語の種類と分布状況が一気に明らかになった。同時に、それまで僅かな資料しか発表されていなかったブータンの公用語・国語として開発されていた **Dzongkha** 語についても、やはり van Driem の文法が出版され、漸くこの地域の TB 言語の全体像が明らかにされた (van Driem 1991b, 1992a)。これらは、いずれもブータン政府の刊行物である。van Driem は、更に、Leiden 大学で自らが director となり、‘Himalayan Languages’ Project をスタートさせた。これは、基本的には、ヒマラヤ地域のあまり知られていない言語の参照文法 (reference grammar) (+語彙) を博士論文にしようと志す Ph. D. candidate を集めて、論文を書くまでの4年間 scholarship を提供する Leiden 大学のプロジェクトである。また、このプロジェクトで reference

grammar を書き終え Ph. D. を与えられた人やこのプロジェクト以外で Ph. D. を持つ人、更には「ヒマラヤ諸語」を対象に論文やモノグラフを書こうとする者も、別途 fellowship を貰い、このプロジェクトに参加できるようになっている。現在、このプロジェクトに所属する人達は12人程にいるが、当然、その数は流動的である。この人達は、van Driem を中心に1つの research team を構成しており、その人達の協力を得て達成する様々なテーマが随時決められているようである。現在のテーマには、Mahakirannti Lexical Database の作成、Language Surveys, Himalayan Grammatical Database, Tibeto-Burman Historical Grammar の編纂のような純粋な言語学的テーマから、Language Death, Language Policy and Ethnicity の研究、Ethnolinguistic Handbook of the Himalayan Region の編纂といった社会言語学的、あるいは文化人類学的テーマまで含まれている。van Driem 自身の著作目録を見ても、1993年頃からヒマラヤ地域の言語のみならず、TB や ST 全体を視野に入れた論文が目につくが、彼がヒマラヤ地域の言語、特に TB 言語に関心を抱き続けといることには変わりなく、「ヒマラヤ諸語」全体の手引きとして、*Languages of the Himalayas* が近々刊行される予定であると言う。

現在、このプロジェクトに関わっている人は次の通りである。

1. Dr. Roland Rutgers (Yamphu 語)
2. Dr. Gerard Tolsma (Kulung 語)  
(この2人は、既に対象言語の reference grammar を書き終えている。)
3. Ms. Heleen Plaisier (Lepcha 語)
4. Mr. Jean Robert Ongenort (Ombule 語)
5. Mr. René Huysmans (Sampang 語)
6. Mr. Mark Turin (Thangmi=Thami 語)
7. Mr. Anton Lustig (Zaiwa 語)  
(理由は不明だが、彼だけは、対象言語がビルマ系 (Burmish) 言語である。)
8. Mr. Joyce van Hoorn (Culung=Chulung 語)
9. Mrs. Dörte Borchers (Sunuwar=Sunwar 語)
10. Mr. Tej Man Angdembe (Magar 語)  
(本人は Limbu 族で、Limbu 語に関する論文を既に幾つか書いている。)
11. Dr. N. K. Rai (Bantawa Rai 語, Puma 語, etc.)  
(Rai は Rai 族で、Pune の Deccan College で言語学を学び、Bantawa Rai 語の記述文法で博士論文を書いている。)

12. Dr. S. R. Sharma (Manchad=Patani 語, West Himalayish languages)

(Sharma は Deccan College の言語学部の教授。)

Rutgers と Tolsma は、このプロジェクトで Ph. D. 論文を書いた人達であるが、Rai と Sharma は、Ph. D. の既得者として参加しているメンバーである。

なお、このプロジェクトの director である van Driem 自身も、reference grammar として Limbu 語 (1987) と上述の Dzongkha 語 (1992a) の文法に加えて、Dumi 語 (1993a) の文法を出版している。

先に触れた Noonan (Univ. of Wisconsin, Milwaukee, UWM) と Genetti (Univ. of California, Santa Barbara, UCSB) は、昨年度米国の National Scientific Foundation (NSF) から助成金を貰い、Nepal Project という新しい言語調査プロジェクトを発足させた。このプロジェクトは、基本的には、大学院生をネパールに送り、現段階では、対象言語の文法素描 (grammatical sketch) を修士論文として書かせるものようである。昨年は、5人の院生をネパールに送り、主に西ネパールのチベット語方言及び他の TB 系言語の調査に当たらせている。彼らの名前と所属、対象言語は次の通りである。

1. Mary Brehm (UWM; Baragaule 語)
2. Karen Grunow-Harsta (UWM; Magar 語)
3. Holly Smith (UWM; Ghale 語)
4. Kristina Hildebrandt (UCSB; Manang 語)
5. Barbara Kelly (UCSB; Sherpa 語)

この中で、Smith は、早くに Ghale 語の文法素描を終えて、Noonan の論文に引用されている。Genetti によれば、他の学生もそれぞれ既に対象言語の文法素描 (+ 語彙) を書き上げているとのことである。これらの学生の論文と語彙は、できれば、Pacific Linguistics シリーズに纏めて出版する計画がある。また、現在、Genetti の学生 Nancy Caplow (UCSB) が、米国在住のインフォーマントについて東ネパールのチベット語の Drogpa 方言の声調をテーマに論文を書いており、別の1人 (姓名は不詳) は、この方言の evidential system について論文を書いている。Caplow は、東ネパールの Tibet 語の Tokpe 方言で博士論文を書く予定であると言う。更に、UCSB で、SIL 所属の2人の学生、Ellen Bartee と Ken Hugoniot が新たにプロジェクトに参加している。

このプロジェクトがいつまで続くのか、またこの学生達は博士論文を仕上げるまで調査研究を続けるのかといったことは不明である。全ては、NSF から十分な助成金



が提供されるか否かに懸かっていると言えるようである。今年度、NSF の助成金が貰えれば、新たに2人の院生を送り込む予定があるようだが、今のところ可能性は少ないようである。現段階では、van Driem のプロジェクトに比べると規模も小さく、野心的ではなく、将来どの程度の規模で継続できるか不明であるが、前者が主として東ネパールのいわゆる代名詞化言語 (pronominalized languages) を対象にしているのに対して、このプロジェクトは、現在のところ、西ネパールの TB 言語とチベット語の方言を対象にしているようなので、相互に補い合う関係にある<sup>11)</sup>。

なお、Nepal Project とは別に、Noonan と Genetti は、Himalayan Linguistics というタイトルで、working papers と正規の journal との中間的なものを目指した online journal を発行する計画を立てているそうである。

このようなプロジェクトでの研究者とは別に、1991年以降に多くの言語学者が個別に TB 言語の調査にネパールを訪れている。既に触れたように、SIL 系の人々を始め、個人的に TB 言語の研究をしている人達には、Michailovsky や Mazaudon を始め、1990年代以前からネパールの調査を継続している学者が今でもかなり残っている。また、以上のプロジェクトに参加している人以外で、1992年以降にネパールの TB 言語研究を始めた人には、S. Georg (Thakali 語)、Kathrin Cooper (Dhimal 語) ('Areal Typology South Asia' Project)、Balthasar Bickel (Belhar 語、その他の Kiranti 諸語; Nepali 語、Maithili 語)、本田伊早夫 (Sekai 語)、桐生和幸 (Newar 語)、松瀬育子 (Newar 語) 等がいる。Bickel (Belhare Rai 語; Nepali 語、Maithili 語) は、1991年に Belhare (Rai) 語の調査を始め、1995年以降は、ネパール語とマイティリ語にも関心を持ち、調査、研究を行っている<sup>12)</sup>。

1997年は、ネパールの言語学者にとっては、記念すべき年になった。この年にネパールの言語学者の長年の夢が漸く叶い、学部から博士課程まで完備した言語学部 (Central Department of Linguistics) が Tribhuvan 大学に開設された。1999年には、既に修士を取得した学生がいたが、その中の1人、K. Khatwada は、Dhimal verb morphology で修士論文を書いている。この他に、ネパール語で Newar 語の Dolakha 方言の文法を書いた R. L. Shrestha や K. Pd. Chalise (Tamang 語) といった人々がいる。全体としては、ネパール語やマイティリ語 (Maithili) のようなインド・ヨーロッパ系言語を専攻する者が多数を占めているようであるが、今後は TB 系言語を専攻する学生も次第に増えてくることが期待される。Tribhuvan 大学以外では、A. Y. Tamang (Tamang 語) (ネパール語で Tamang 語の文法を書く)、V. Rai (Chamling 語)、L. R. Sunuwar (Sunuwar 語)、L. B. Gurung (Gurung 語)、I. Mali (Dolakha

方言), D. R. Shakya (Newar 語), R. Shakya (Dolakha 方言), P. K. Tamrakar (Dolakha 方言) 等の名前が挙げられる<sup>13)</sup>。今年度からのネパール言語学会 (The Linguistic Society of Nepal) の会長に選出された M. P. Pokharel は、元来ネパール語が専門であったが、最近では学生指導も兼ねて、TB 系言語に広く興味を持ち、調査、研究を行っている。

上述のように、ブータンの TB 言語<sup>14)</sup> の調査と研究は、Michailovsky と Mazaudon の Dzongkha 語や Bumthang 語の研究は別として、主に van Driem とブータン人の研究者の努力で一応概要がはっきりしてきたが、個別言語の調査と研究はまだ漸く始まったばかりである。今後、この地域のチベット語方言を含む TB 系言語のよりきめ細かい調査研究が行われることが期待される。

ネパールとブータンでの研究の進展に比べると、西北インドの TB 系言語の調査、研究は、上述のように、既に1990年までに一応概観できる程度の成果は見られたが、質的には疑問点が多くあった。その後、G. M. Trivedi が Byans (=Byangsi) 語の文法 (1991) を出版し、Anju Saxena (Kinnaur 語、その他の West Himalayish 諸語) が Kinnaur (=Kanaur) 語について博士論文 (Univ. of Oregon 1992) を書いていたが、全ての言語の資料の精度や記述が充分とは言えなかった。この状況を補うために、1992年から2年計画で、ウッタルプラデシュ州 (Uttar Pradesh) の5種の TB 言語 (Rangpa/Rongpo 語、Byans 語、Darma/Darmiya 語、Chaudans/Chaudangsi 語、Raji/Raute 語) を対象に、私が文部省の補助金を受け、それぞれの言語の文法素描 (skelton grammar) の記述と1,000語以上の語彙の収録を目標に、S. R. Sharma (Decan College; Rangpa 語、Byans 語) と Shree Krishan (当時 University of Manipur; Darma 語、Chaudans 語、Raji 語) に調査を依頼した。S. R. Sharma は一応最終草稿を完成したが、Shree Krishan は、2度の交通事故に遭うといった不幸な出来事で、不完全な草稿を提出したままに終わっていた。2人の草稿の編集は Randy J. LaPolla (City University of Hongkong) に引き継いでもらい、漸く草稿の編集が終わり、近いうちに出版される予定になっている (Nagano and LaPolla (eds) 2000)。なお、その際、研究協力者としてプロジェクトに参加した武内紹人には、ヒマチャルプラデシュ州のチベット語方言 (Khoksar 語、Tot=Stot 語) の調査に当たってもらったが、調査結果は、概要が研究会で発表されただけで、まだ論文に纏められていない。

日本では、高橋慶治が、1996年から Kinnaur 語の調査を行い、「キナウル語の記述的研究」(高橋 1999) を発表している。

現代ヒマラヤ諸語の研究とは異なる性質の研究であるが、古くからチベット語やポ

ン教 (Bon religion) の研究者の注目を浴びていた言語に Zhangzhung 語がある。この言語の系統の問題については、『言語学大辞典』の「ヒマラヤ語系」の項目 (1992c) や西 (1991) で多少触れておいた。その後、1999年に Tribhuvan 大学で開催された第5回 HLS で、van Driem がこの言語の系統に関する論文 (Zhangzhung and its relatives on the Southern flank of the Himalayas) を発表している。最近になって、長野泰彦を代表とする国立民族学博物館の『ボン教文化の総合的研究』プロジェクト (文部省科学研究費補助金による国際学術研究『チベット文化域におけるボン教文化の研究』[1996-1998] 及び『シャンシュン語の再構とチベット文語形成に関する総合的研究』[1999-2001]) の中で、改めて Zhangzhung 語を取り上げ、Zhangzhung 語文献の収集、文献の電算機による分析、チベット語やヒマラヤ諸語との比較研究を行っている。1999年8月には、国立民族学博物館でボン教文化に関するシンポジウム ('New Horizons in Bon Studies') が開催され、Zhangzhung 語部門では、欧米、中国、日本等の Zhangzhung 語、チベット語、TB 言語の専門家が出席し、論文発表と討議が行われた。このシンポジウムでの発表論文は、言語学関係以外のものは Kar-may and Nagano (eds) (2000) として同博物館の『調査報告』15号で既に刊行されており、言語学関係のものは Nagano and R. J. LaPolla (eds) (2000) として同じシリーズで近々刊行される予定である。

1990年代以降、多くの外国人研究者が再びチベット語方言調査に関心を持ち始めているようである。その一部については、既に触れたので改めて触れない。最近になって、かつて SIL の「ネパールの言語調査」の際に Jirel 方言の調査に当たった A. Maibaum, E. Strahm が再びネパールに戻り、この方言の調査を再開している。また、現在 Tribhuvan 大学の言語学部に所属している Stephan A. Watters は、Dzongkha 語の prosody について修士論文 (Univ. of Texas, Arlington) を書き、現在は Sherpa 方言を研究している。日本では、昨年、加藤昌彦が Manali に短期間滞在し、Spiti 方言の資料を収集してきた (加藤 2000) が、この調査によれば、少なくとも声調に関しては S. R. Sharma の記述と異なるようである。従って、西 (1986) で西部改新的方言に分類した方言については再考する必要があると考えている。

1990年代で最も注目に値するのは、R. Bielmeier (University of Berne) が代表者となって、1992年から1998年にかけて、Schweizerischer Nationalfonds の助成金により、ヒマラヤ地域を含むチベット語域全体を視野に置いた方言調査が行われたことである。これは、チベット語の歴史的研究を最終目標とした2つのプロジェクト、'Historisch-vergleichender Wortschatz tibetischer Dialecte' (1992年4月1日~1995年3

月31日)と‘Grundlagen einer historischen Grammatik des Tibetischen’(1995年4月1日~1998年3月31日)を基盤としている。前者は、チベット語方言から37方言(7種の西部方言,7種の中央方言及び16種の東部方言[カム方言とアムド方言])を選び、主にプロジェクトのメンバーを派遣して、面接形式で予め選択された語彙を収集し、その結果を基に、伝統的な比較方法で方言形と文語(Written Tibetan)形の間音韻対応を立て、チベット語の各方言内での音声変化やチベット語の歴史的発達様式を明らかにしようとするものであり、同時に調査結果をプロジェクトのテーマである比較語彙集に纏めようとするものであった。後者は、前のプロジェクトで収録した資料を基に、やはり各方言の文法を文語文法と体系的に比較して、方言に見られる文法の差異や変化を辿り、チベット語(これが文語を指すのか、標準的方言を指すのか不明)の通時的発達様式を明らかにしようとするものであった。このプロジェクトの成果(文献参照)は、現在次々と発表されており、最終的目標の1つであった *Comparative Dictionary of Tibetan Dialects (CDTD)* は既に編集を終えているとのことである。この *CDTD* には、57方言から34方言の語彙が収録されており、第1巻は57方言の比較名詞辞典(557 pp)、第2巻は34方言(いずれは45方言)の比較動詞辞典(272 pp)で、第3巻は索引(617 pp+271 pp)である。比較辞典では、チベット語の方言形と文語形が併記され、それに英語訳とドイツ語訳が附されているとのことである。これと並んで、記述が進んでいた Shigatse, Themchen (アムド方言)と Derge (カム方言)の諸方言の文法を書き終えており、更に、Tabo 方言(Spiti 方言)と Kyirong 方言の文法の記述も1年以内に完了する予定であると言う。この他に、Himalayan Speech Act Participants (SAP) というテーマで書かれたプロジェクトの research group のメンバーの論文が *Linguistics of Tibeto-Burman Area (LTBA)* (University of California, Berkeley) の特集号で発表される予定であると言う<sup>15)</sup>。

Bielmeier のプロジェクトの目標は非常に興味深いものであるが、チベット語の歴史的研究には、文語形そのものの性格を予め明確にしておくことが必要で、これがある意味ではこれまでのチベット語の歴史研究の大きな問題点であったことを充分認識しているのかどうか、更に、方言形の中には文語形では説明できない要素が含まれていることが既に知られているが、そのような要素をどのように処理するのか等の多くの問題があり、このプロジェクトの成果が問題の解決にどの程度貢献できるか注目に値する。

西(1990)で、K. P. Malla を中心に多くの Newar 語の研究者が協力して行っている‘The Classical Newari Dictionary’ Project について多少触れた。このプロジェ

クトは、当初 Cwasa Pasa の設立した The Nepal Bhasa Dictionary Committee のプロジェクトとして発足し、1983年に第1段階の Amarasimha 編の Amarakośa (Sanskrit-Newari Dictionary) の11種の写本に基づいた *Newar Lexion* の編纂を1985年に終えている。その後、第2段階として、1986年からは K. P. Malla を編集主任として38種の様々なジャンルの文献に基づいた *Classical Newari Dictionary* の編纂を行っていたが、漸く作業を終え、2000年3月の時点で既に印刷も完了し、近々出版される予定である。この辞典には30,560項目程の Newar 語の語彙が収録されている。この辞典には、各収録語の出典とその例が現れる文例が一々示されている点でも、TB 言語の文語辞典としてのみならず、恐らくこれまでにアジアで出版されたこの種のどの辞典と比べてもひけをとらない言語辞典となると言えよう。このプロジェクトの画期的な点は、Lexicon がインターネットのウェブサイト (<http://lexicon.asimart.com/mysqllex>) からダウンロードできる点である。更に、*Classical Newari Dictionary* も、その source となった写本の写真と共に、近い将来インターネットでダウンロードできるようにする予定であると言う。

ここでは詳細には触れないが、現在、Newar 語だけでなく多くの言語の辞書が、外国人言語学者だけでなくネパール人によっても既に出版されたり、編纂されつつあるとのことである。これは恐らく少数民族の間に見られる民族意識の昂揚と関係があるのではないかと思われる。これについては、Y. P. Yadava and T. R. Kansakar (eds) (1998) や S. Toba (ed.) (1998) を参照されたい。

私は、1992年の国際漢蔵学会 (Univ. of California, Berkeley) で A survey of the present state of our knowledge about the Himalayan languages (西 1992i) を配布したが、その中にヒマラヤ諸語研究の今後の課題として類型的研究と社会言語学的研究を挙げておいた。最近発表された論著を見る限り、社会言語学的研究は着実に増えているように見える。かつては、この分野の研究では、社会言語学に対する一部の言語学者の偏見もあり、ネパール人学者による僅かな成果しか見られなかったが、現在は、外国人学者もこれに加わり、質的にも向上しつつあるようである。なお、日本人言語学者によるこの分野の研究はこれまで皆無であったが、最近、人類学者の名和克郎が、博士論文 (1999) と研究会での発表論文 (2000) で、ネパール極西部の Byansi の社会における多言語使用 (multilingualism) や多言語変種併用状況 (poliglossia) について詳細な記述を行っている。彼の記述は、この社会におけるコード切り替え/混淆 (code-switching/mixing) から多言語使用者の意識 (／態度) にまで及んでいる。多言語使用はヒマラヤ地域の全ての言語社会 (speech community) に認められる状況

であると思うが、それを分析、記述するのは、言語学者よりも、むしろ長期間にわたって参与観察を行う文化人類学者に適しているのではないかと考えている。

類型的研究としては、西 (1991) で触れた音韻類型に関する Michailovsky の研究、歴史的研究の試みの一環として行われた Saxena の (West) Himalayish 諸言語の動詞の一致体系の比較研究 (1997)、Kirant (=Rai-Limbu) 系の6つの言語 (Khaling 語, Thulung 語, Camling 語, Bantawa 語, Athpare 語, Limbu 語) の共時的比較文法である Ebert (1994)<sup>16)</sup>、ネパールの13の TB 言語 (Athapare 語, Baragaunle [Tibetan dialect] 語, Chyantel 語, Ghale 語, Gurung 語, Hayu 語, Kham 語, Limbu 語, Magar 語, Nar-Phu 語, Dolakha Newar 語, Kathmandu Newar 語, Thakali 語) の音韻、形態、統語要素に見られる様々な類型の特徴を取り上げ、それぞれの言語に見られる類型の特徴をネパール語 (印欧系) の対応するそれと比較して、言語接触によるネパール語からの借用関係を論じた Noonan (1999) 等を除けば、纏まった研究はまだ見られない。西 (1992d) は、「ヒマラヤ諸語」の [言語特徴] の項で、当時纏まった記述のあった18種程のヒマラヤ諸語を取り上げ、関係節 (relative clause)、文法関係 (grammatical relations) 及び名詞句 (noun phrase) の語順 (word order)、格標識 (case markers)、格の融合 (case syncretism)、能格・与格標示 (ergative/dative marking)、代名詞化 (pronominalization) (=verb agreement) 等の限られた形態、形態統語、統語類型について、既にかなり詳細な研究を行っていた。最近の研究では、類型的研究の対象とされる言語要素の数や種類は増えているが、取り上げられる言語数がまだ充分とは言えない。しかし、今後、個別言語の記述が進むにつれて、この分野の研究も着実に進展するであろう。

最近になって、M. P. Pokharel は、東ネパールで、次の3種の Rai 系の言語を発見したとのことである。(1) Rakong Rai 語 (Nigalbas [Diplung], Khotang), (2) Lulam Rai 語 (Okhre, Bhojpur), (3) Tomyang Rai 語 (Lumbang, Sankhuwa Saha) である。尤も、鳥羽によれば、SIL の予備調査でその存在はいずれも既に知られていたが西ドイツと Tribhuvan 大学の言語調査プロジェクトで漏れたものだとのことであるが、確認はできなかった。このような発見は予想されていたことではあるが、今後更に新言語が発見される可能性はほとんどなくなっていると言えよう。

### 3. 結び——ヒマラヤ諸語研究の最近の傾向

1991年以降に、誰がどの言語あるいは諸言語を調査、研究しているか、どのような

プロジェクトが行われたか、あるいは進行中であるかといったことを中心に概観してきた。私自身は、ここ10年程は、NW India の言語調査プロジェクトを2年程主宰した以外は、ヒマラヤ諸語に関わるものが全くなくなり、その間に激増したとも言える研究者の論著にほとんど触れることなく過ごしてきたので、残念ながら個々の研究の内容にまで踏み込んで紹介することはできない。ただ言えることは、reference grammar のような詳細にわたるものであれ、skelton grammar/grammatical sketch のような素描程度のものであれ、対象言語の文法の全体像を先ず記述し、十分な語彙を収録することが目標となってきており、その過程でその言語の文法現象の一部を論文にすることがあっても、以前のようにそこで終わることが少なくなってきたことである。これは、博士論文や修士論文として文法全体を記述することが要求されてきたからだとも言える。何故そうになったかは、先ず、世界の多くの言語学者が現在関心を抱いている「(消滅の) 危機に瀕した言語 (endangered languages)」を人類の文化遺産としてできるだけ記録に残しておこうとする運動と関係があると思われる。更に、こうして収集された言語資料から帰納される音韻や文法現象の類型的研究が1つの傾向として次第に見られるようになることも予想される。この類型的研究は、ヒマラヤ地域のTB言語に限定されることなく、TB言語全体、更にはもっと広い視野で行われるようになるであろう。

R.M.W. Dixon は、その著書(1997)の中でできるだけ多くの言語学者ができるだけ多くの未記述の「危機に瀕した言語」の文法を書く必要があることを強調しているが、その際に、言語学者は、これまでどの言語の文法もその全体を実際には記述できなかったような文法理論に則るのではなく、Basic linguistic Theory をその基盤とするよう提案している。Basic Theory とは、‘the fundamental theoretical concepts that underlie all work in language description and change, and the postulation of general properties of human language’である。この‘postulation of general properties of human languages’は、類型的研究の蓄積によって可能になる。もしそうであれば、文法記述そのものもそれに貢献するものでなくてはならず、そこから Basic Theory は言語類型を基盤とする「伝統文法」であると解釈でき、生成文法やそれから派生した多くの文法理論は含まれていないようである。勿論、これに異論があってもおかしくはないが、要は、あまり文法理論に拘るより、兎に角、個別言語の文法を記述すべきであるということだと思う。ヒマラヤ地域のTB言語はできるだけ多くできるだけ早く記録しておかなくてはならないという現状を考えると、Dixon の主張は理解できる。

以上、充分とは言えないが、一応、過去から現在に至るヒマラヤ地域の TB 言語の研究状況を概観してみた。繰り返すことになるが、現在、この地域で行われているネパール人学者、欧米人学者の様々な言語研究のプロジェクトには、一定の方向が見られる。まず、いずれのプロジェクトもただ単発的な論文を書くだけではなく、最終的には対象言語の実質的な文法を書き、その辞書を編纂することが大きな目標になっており、その前段階でも、その言語の *grammatical sketch* (+語彙) を書くことが求められていることである。多くの場合、それが修士論文や博士論文の形で書かれている。次に、修士論文のレベルの学生はともかく、それ以上の資格を持つ研究者が地域の言語、特にネパール語に堪能な点である。van Driem のプロジェクトの研究チームに所属する人々には、何らかの形でそれ以前にインドやネパールに滞在したり、言語学以外の分野で既にこの地域で研究実績のある人々が多く含まれている<sup>17)</sup>。勿論、チベット語方言やチベット文化の影響が大きかった民族の言語の研究には、チベット語(ラサ方言のような標準的方言)<sup>18)</sup> の十分な知識(と運用能力)を持っていることが望ましいと思うが、全体的に見て、たとえば、ネパールの TB 系諸言語の場合、ネパール語が及ぼした、また及ぼしつつある影響から考えて、それらの言語の研究者には十分なネパール語の知識(と運用能力)が要求されるようになるであろう。Genetti が最近ネパール語の研究を行っているのも、このような認識に立ってのことだそうである。

振り返って日本の現状を見てみると、TB 言語研究者の数が欧米に比べて極端に少ないというだけでなく、共時的研究での貢献度は、僅かな例外を除いて、それ程高くなかったように思う。これには、教育の問題もあるが、研究の組織のあり方にも大きな問題があったと思う。世界的に見れば、TB 言語の研究者はこの20年程で着実に増えてきており、その研究の質も高くなってきている。これには、多くの TB 研究者を育てた James A. Matisoff (Univ. of California, Berkeley) や S. DeLancey (Univ. of Oregon) 等に負うところが大きかった。現在では、40代の研究者に、たとえば van Driem, Genetti, LaPolla, Jackson T. -S. Sun 等の優秀な言語学者がいて、活発な研究活動を行っており、更に若い世代でも優秀な研究者が輩出しつつある。従って、ヒマラヤ地域に限らず、TB 言語研究全体の将来は明るいと思っている。

小稿では網羅的な文献目録は割愛するが、1991年までの関連文献については西(1986, 1992d)を、また、1992年から1998年までの文献については、Toba の文献目録(1998)を参照されたい。この文献目録は、ネパール語で書かれた文献に詳しい点でも役に立つ。また、現在は、個人的にホームページを開設し出版物のリストを掲載



している研究者が増えており、そこから比較的新しい出版物の情報が得られるが、最新の情報は、通常そのホームページに電子メールのアドレスが付されているので、直接交信すれば提供してもらえははずである。個々の論文や著書の内容についても、ほとんど触れなかったが、1992年以降の「ヒマラヤ諸語」の主立った研究者とその研究内容について知るための格好の入門書として Bradley (ed.) (1997) と Yadava and Glove (eds) (1999) の2つの論文集があるので、一読をお勧めしたい。

## 謝 辞

今回この報告を書くに当たって、口頭で直接に、あるいは e-mail を通して間接的に、情報を提供して頂いた次の方々、この場を借りて謝辞を述べさせて頂く。Dr. K. P. Malla, Prof. T. R. Kansakar, Prof. Y. P. Yadava, Prof. M. P. Pokharel, 鳥羽季義氏, Dr. Boyd Michailovsky, Prof. K. H. Ebert, Prof. M. Noonan, Prof. C. Genetti, Prof. R. Bielmeier, Prof. van Driem, Dr. B. Bickel, Mr. Mark Turin.

## 注

- 1) この論文は、当初、(上)、(中)、(下)の3部にする予定であった。(下)には、類型論的なことを書く予定で、そのために NW India の TB 系言語のより正確な情報が必要であったので、2人のインドの言語学者に調査を依頼したが、様々な事情でこれが予定より大幅に遅れ、その間に『三省堂言語学大辞典』の「ヒマラヤ諸語」の言語特徴の項にある程度書いてしまったので、結局時間切れの形でそのまま中止してしまった。
- 2) 本年度の Sixth Symposium は、7月15日から17日までの3日間にわたり、University of Wisconsin, Milwaukee で Michel Noonan の主宰で開催された。この HLS は、TB 関係の学会としては、国際漢蔵学会 (The International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics [ICSTLL]) に次ぐ規模の学会に成長しつつある。
- 3) 言語学や社会言語学では、このように status がはっきりしない言語を単に variety とか lect, 人によっては idiom と呼ぶが、ここでは却って面倒なので全て言語としておいた。なお、このような用語を使用する理由には、「方言」という言葉の持つ negative なニュアンスを避ける目的もある。
- 4) Vinding は、この著書の中で Tamang 系の言語の名称を列挙しているが、その中に Ghale 語を加え、私の論文 (1982) を参照、としている。しかし、私は、これまでに一度も Ghale 語が Tamang 系であると述べたことがないことをここに明言しておきたい。ただし、この判断が、そこに挙げた資料 (Swadesh の100語表に相当する Ghale 語と Tamang 系の3言語の資料) から彼が下した判断であるとするとは話は多少異なる。この問題について、私は、別の論文 (Nishi 1983a) で検討した上で、Swadesh の基礎100語表に相当する語彙だけを比較すれば同源語共有率はかなり高いもの ( $50/86 \approx 58\%$ ) になるので、Ghale 語は Tamang 系言語と同じ下位語支の言語であると言えるように見えるが、それにも拘わらず Ghale 語が Tamang 系言語であることができないとして、幾つかの根拠をそこに挙げている。つまり、基礎語彙表、特に100語表に基づく語彙統計学的方法は、ここでは妥当でない例となる。
- 5) 最近の社会言語学の概論は必ず言語と方言の問題に触れているが、S. Romaine (1994) は、第1章で少数民族言語の視点からこの問題が論じられている点で言語学者以外にも興味深い

ものではないかと思う。

- 6) ここに指摘したような系統論に関する多くの問題について明快に論じた比較的最近の著書に R. M. W. Dixon (1997) がある。この中で Dixon は、言語の発達史について punctuated equilibrium theory (断続的均衡理論) なるものを提唱しているが、この理論は、文化人類学者にも多分興味深い理論であると思う。TB 言語に見られる drift の例は、R. J. LaPolla (1994) を参照されたい。
- 7) 1970年代まで SIL に所属して「ヒマラヤ諸語」を調査していた学者には、その後、調査、研究を継続した上記の人々の他に次のような人々がいる。Gary Shepherd (Magar 語), Maria Hari (Thakali 語, Tamang 語, Sotang 語), Doreen Taylor (Tamang 語), Fay Everit (Tamang 語), Marlene Schulze (Sunwar 語), Dora Bieri (Sunwar 語), Andreas Holzhausen (Kulung 語), Larry L. Seaward (Ghale 語) 等。
- 8) なお、私自身は、長野氏と同じプロジェクトでネパールに滞在中に、Manang へのトレッキングの帰途、Thonje で出会った Samdo (Gorkha district) 出身のチベット人から Larke 方言と思われる約180項目の資料と、カトマンズで出会ったブータンの Hadzong 出身者から約160項目の方言資料を録音した。実は、チベット語方言は、僅かな語彙でも、文語との対応を考えて質問項目を選べば、音韻変化についてかなり体系的な知識が得られる。また、同じ理由から、中央方言であれば、テープだけからでも声調を聞き取ることが比較的容易であると言える。
- 9) なお、私の分類の詳細は、「現代チベット語方言の分類」(西 1986) とそれ以前に発表した西 (1979) を参照。ただし、後者にはかなりの数の misprints が含まれている。Bielmeier の分類については、西 (1986) の注27) に批判しておいた。
- 10) 1980年代以降にネパールで TB 系言語の調査を始めた言語学者、特にヨーロッパの言語学者には、元来他地域、他語族の言語を研究していた者がかなり見られる。Ebert は、印欧語族のゲルマン諸語から始まり、アフリカのチャド語派 (Chadic languages) の Kera 語や Kwang 語を調査し、Kera 語の文法を書いている。その後、南アジアにおける異なる語族 (Indo-Aryan, Dravidian, Austroasiatic, TB) 間の言語接触や類型論への関心から、1980年代中頃からネパールの Kiranti 系言語の調査に携わるようになったようである。Noonan は、TB 系言語以外にも、ケルト諸語 (印欧語族)、ナイル・サハラ語族 (Nilo-Saharan) の西ナイル諸語 (Western Nilotic) (Lango 語の文法を書いている)、セリッシュ語族 (Salish) の言語等の調査、研究を同時並行的に行っている。彼が調査した言語は、更に多岐にわたっており、たとえば、オーストロネシア語族 (Austronesian) の Malagasy 語, Malay 語, 印欧語族のアルメニア語、ベルシャ語にまで及んでいる。また、Noonan には、文法理論等、一般言語学的テーマの論著も多い。また、かつて西ドイツの「ネパールの言語調査」プロジェクトに関わった Weidert は、インドのオーストロアジア諸語 (Austroasiatic) の研究で博士号を取得し、その後インドの TB 系言語の調査、研究を始めた学者であり、Bielmeier も元来印欧系言語が専門であった。
- 11) 日本言語学会を始め、オーストラリア、ニュージーランド、韓国の言語学会と台湾の中央研究院語言研究所の協賛で、2001年7月25日から8月3日まで、UCSB で Linguistic Society of America Summer Linguistic Institute が開催されることになっている。Charles Li が Director となり、この SLI の開催には前日本言語学会会長の柴谷方良教授 (神戸大学) も協力している。この SLI では、TB 関係の3つの class (morphology and syntax [C. Genetti], TB prehistory [G. L. van Driem], comparative reconstruction of TB [J. A. Matisoff]) が設けられる予定であると聞いている。
- 12) なお、Bickel は、Belhare Rai 族の文化、社会にも関心を抱いており、民族言語学的テーマの論文も書く一方で、Belhare Rai 族の 'life and language' というテーマで視聴覚資料を大量に録音しているとのことである。
- 13) Tribhuvan 大学に言語学部を設置しようとする運動は、既に1980年代のネパール言語学会の設立に始まると言える。第1回ネパール言語学会は、1980年に Tribhuvan 大学で開催されたが、偶々カトマンズに滞在していた私に Kansakar 氏から学会の3日前に発表の依頼があり、'Classification of some Tibetan dialects of Nepal' というタイトルの論文を発表した。この論文は、その後『愛媛大学法文学部論集 (文学科編)』(1983b) に発表した。ネパール言語学会の定期大会は、常に財政難に悩まされながらも、その後中断されることもなく、毎年無事に開催されている。このような努力を重ねて漸く言語学部の設立が認められたのであ

る。

ネパールにおける言語学の発展の経緯については、C. M. Bandhu (1997) に詳しい。これには、更に T. R. Kansakar と Y. P. Yadava の comment が付いている。

ネパールの言語学者全体の最近の研究については、Y. P. Yadava のレポート (1999) を参照されたい。

- 14) 現在明らかになったブータンのチベット語以外の TB 言語は、van Driem (1992, 1995) の分類に従うと、次の通りである。(1) Dzongkha, Brokpa, Brokkat, Lakha, Cho-ca-nga-ca-kha, (2) Black Mountain Monpa (Eastern dialect と Western dialect [‘Olekha]), (3) Dzala, Chali, Dakpa, Bumthang, Kheng, Kurtöp, Mande (=Henkha/nyenkha/Adap/Phobjikha), (4) Tshangla (=Sharchop/Shächop), (5) Lepcha, (6) Lhokpu, (7) Gongduk.
- van Driem (1994, 1995) は、Dzongkha 語とは別に、Black Mountain Mönpa 語について動詞の活用体系を中心に既に発表している。なお、van Driem (1995) は、論文の後半で、漢語 (Chinese) をチベット語系 (Bodic) とヒマラヤ語系 (Himalayan) と纏めて TB の下位語群とし、更にそれまでの ST の下位分類を全体的に改訂する極めて野心的な仮説を立てたが、TB 言語全体を十分に検討しておらず、その論拠は極めて薄弱である。また、彼は、これに先立つ論文 (van Driem 1992, 1993) で従来の Kiranti 系言語に Newar 語を加えた Mahakiranti 語群を提唱した。この説は、Dolakha 方言に見られる動詞の代名詞化が Classical Newar の動詞形態法を反映しているとして、Proto-Newar を代名詞化言語であったとする仮説に基づいている。T. R. Kansakar (1999) は、最新の Classical Newar 研究と Newar 語方言研究の成果に照らして、van Driem 説を検討している。Kansakar は、van Driem 説の是非については断定を避けているが、否定的な結論を出している。
- 15) Bielmeier のプロジェクトの成果は文献の Bielmeier, Haller, Häslar, Hein, Huber, Volkart の項を参照。
- 16) Ebert は、東北インドと東ネパールの異系言語の接触から、南アジア全体の言語連合 (Sprachbund) とはまた異なる言語特徴を持つ小規模な言語連合が拮定されるとの仮説を立て、その仮説を裏付ける目的で、Schweizerischer Nationalfonds (4/1997-3/2000) の助成金で ‘Areal Typology South Asia’ Project を組織した。Cooper は、このプロジェクトのメンバーとして Dhimal 語の調査に当たったものである。なお、言語連合とは、異系言語ではあるが、言語特徴を共有するに至った、地理的に隣接し合った言語群を指す用語である。古くからバルカン言語連合がよく知られているが、インドを中心とする南アジアも全体として Sprachbund, あるいは、言語領域 (linguistic area) を形成するとされている。これについては、たとえば、Masica (1976, 1991) 等を参照されたい。
- 17) van Driem の Himalayan Languages Project で fellowship が貰える条件には、言語学上の資格に ‘the candidate is expected to acquire a good command of both the spoken and written forms of the contact language or lingua franca in the chosen research area. Depending on where the research is conducted, the lingua franca could be Urdu, Hindi, Nepali, Assamese, Chinese, Thai, Lao or Malay’ といった媒介言語の能力、更には健康状態や調査地域への適応性等の条件が加えられている。この lingua franca に Burmese が含まれていないのは、意図的なのか単に割愛したのか不明である。
- 18) しかし、ネパールや西北インドの TB 言語にかつて影響を与えたチベット語方言が決してラサ方言だけではないことは明らかである。たとえば、西 (1992f) の「マナン語」の [語彙] の部分を参照されたい。

補注) Dr. Michailovsky 及び夫人の Dr. Mazaudon は、1977年にブータンを訪れ、Dzongkha 語と Bumthang 語を調査。1985年に Dr. Michailovsky はブータンを再訪し、両言語の再調査をしている。1992年にオスロで開催された国際チベット学会では、共同でブムタン語について発表している。現在、同氏は主としてリンブ語、Mazaudon 氏はタマン語の研究を続けている。なお、両氏は1978年にカトマンズで Naxi 語 (納西語) を調査したが、かつて故橋本萬太郎氏もカトマンズ滞在中に Naxi 語を調査したと伺ったことがあり、おそらく同じインフォーマントであろう。1999年、Mazaudon 氏は中国雲南省麗江で Naxi 語を調査している。

興味深いことは、Michailovsky 氏も1996年にネパール語の inferential perfect について論文を書いていることである。

Michailovsky 氏の優れた業績は、博士論文となった Hayu 語の記述文法である

(Michailovsky 1981)。私が概説した「ハユ語」(1992a)はこれによっている。この言語は、彼が調査した当時、既に話者数が数百名とされており、私は「ハユ語の生命は、明らかに、はかない運命にある」と述べたが、この言語の使用状況を同氏に尋ねたところ、次のように伝えてきた。I visited the Hayu in Murajur and Manedihi in 1995. In Murajur, children in a lot of households are not learning Hayu any more. But my informants have not suffered any catastrophic language change. In Manedihi, the language seems to be alive and well, in spite of everything.

## 文 献

- Bandhu, C. M.  
1997 Linguistics in Nepal. In P. K. Khattri (ed.) *Social sciences in Nepal: Some thoughts and search for direction*, pp. 144–166. Kathmandu: CNAS.
- Bielmeier, R.  
(To appear) Balti Tibetan in its historical linguistic context (In print for proceedings of the International Symposium on Karakorum-Hindukush-Himalaya: Dynamics of Change, 1995, Islamabad).  
1997 The Tibetan dialect of Mustang: Dialect-geographical and historic-linguistic approaches. Paper presented to the conference, ‘Results and Aspects of the Nepal-German Project on High-Mountain Archaeology’, Kathmandu.  
(To appear) Syntactic, semantic, and pragmatic-epistemic functions of auxiliaries in Western Tibetan. *LTBA*.
- Bielmeier, R., et al. (eds)  
(To appear) *Comparative dictionary of Tibetan dialects (CDTD)*.
- Bradley, D. (ed.)  
1997 Tibeto-Burman languages of the Himalayas. *Papers in Southeast Asian linguistics* 14 (Pacific linguistics, Series A-86).
- Dixon, R.M.W.  
1997 *The rise and fall of languages*. Cambridge, New York and Melbourne: Cambridge University Press.
- Driem, G. L. van  
1987 *The grammar of Limbu*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.  
1991a *Report on the first linguistic survey of Bhutan*. Thimphu: Royal Government of Bhutan.  
1991b *Guide to official Dzongkha romanization*. Thimphu: Royal Government of Bhutan.  
1992a *The grammar of Dzongkha*. Thimphu: Royal Government of Bhutan.  
1992b In quest of Mahakiranti. *Contributions to Nepalese studies* 19(2), 241–247.  
1993a *The grammar of Dumi*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.  
1993b *The Newar verb in Tibeto-Burman perspective*. *Acta Linguistica Hafniensia* 26, 23–43.  
1994 East Bodish and Proto-Tibeto-Burman morphosyntax. In H. Kitamura, T. Nishida and Y. Nagano (eds) *Current issues in Sino-Tibetan linguistics*, pp. 608–617. Osaka: National Museum of Ethnology.  
1995 Black Mountain conjugational morphology, Proto-Tibeto-Burman morphosyntax, and the linguistic position of Chinese. In Y. Nishi, J. A. Matisoff and Y. Nagano (eds) *New horizons in Tibeto-Burman morphosyntax* (Senri ethnological studies 41). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Ebert, K. H.  
1994 *The structure of Kiranti languages: Comparative grammar and texts*. Zürich: Seminar für Allgemeine Sprachwissenschaft, Universität Zürich.
- Georg, S.  
1996 *Marphatan Thakali. Übersuchung zur Sprach des Dorfes Marpha im Ober Kâli Gandaki-Tal/Nepal* (LINCOM Studies in Asian Linguistics 02). München: LINCOM

- Europa.
- Glover, W. W.  
 1970 Cognate counts via the Swadesh list in some Tibeto-Burman languages. In E. A. Hale and K. L. Pike (eds) *The tonal systems of Tibeto-Burman languages of Nepal*, Part 2, pp. 23–26. Urbana: University of Illinois.
- Glover, W. W. and J. K. Landon  
 1980 Gurung dialects. *Papers in Southeast Asian linguistics* 7 (Pacific linguistics, Series A-53), pp. 29–77.
- Grierson, G. A. (ed.)  
 1909 *Linguistic survey of India (LSI)*, Vol. III, Part I. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing (Reprinted in 1967, Delhi, Varanasi and Patna: Motilal Banarsidass).
- Haller, F.  
 1989 Die tibetische Wörterliste von J. E. Fischer. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 43(2/3), 369–73.  
 (To appear) *Dialekt und Erzählungen von Themchen*.  
 (To appear) *Dialekt und Erzählungen von Shigatse* (Beiträge zur tibetischen Erzählforschung Band 13). Bonn: VGH Wissenschaftsverlag GmbH.  
 (To appear) The verbal categories of Shigatse Tibetan and Themchen Tibetan. *LTBA*.  
 1999 A brief comparison of register tone in Central Tibetan and Kham Tibetan. *LTBA* 22(2), 77–98  
 (To appear) The verbal categories of Shigatse Tibetan and Themchen Tibetan. *LTBA*.
- Hansson (Hanßon), G.  
 1988 On the grouping of the indigenous Tibeto-Burman languages and dialects in the eastern hills of Nepal: A brief classification, based on field research of the ‘linguistic survey of Nepal’ (ms.).  
 1991 *The Rai of Eastern Nepal: Ethnic and linguistic grouping—Findings of the linguistic survey of Nepal*. Kathmandu: CNAS, Tribhuvan University.
- Häsler, K.  
 1999 A grammar of the Tibetan Sde dge dialect. Inaugural dissertation, University of Bern.  
 (To appear) An empathy-based approach for the description of the verb system of the Dege dialect of Tibetan. *LTBA*.
- Hein, V.  
 (To appear) The role of the speaker in the verbal system of the Tibetan dialect of Tabo/Spiti. *LTBA*.
- 星 実千代  
 1984 A Prakaa vocabulary—A dialect of the Manang language. *Anthropological and linguistic studies of the Gandaki area in Nepal* (Monumenta Serindica 12), pp. 133–202. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.  
 1986 An outline of the Prakaa grammar—A dialect of the Manang language. *Anthropological and linguistic studies of the Gandaki area in Nepal* (Monumenta Serindica 15), pp. 187–317. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Huber, B.  
 1999a Tone and phonation types in Lende Tibetan: A conservative phonological development. *Themes in Himalayan languages and linguistics* (Proceedings of the 5th Himalayan Languages Symposium, Kathmandu).  
 1999b Evidentialität. Zur Sprecherbezogenheit im Verbalsystem des tibetischen Dialekts von Lende (Kyirong). *Berner Zirkel für Sprachwissenschaft* 21(4).  
 1999 Tone and voicedness of initial consonants in Lende Tibetan. Paper presented at Treffen des European Project on Himalayan Languages, Leiden.  
 (To appear) Preliminary report on evidential categories in Lende Tibetan. *LTBA*.

- Karmay, S. G. and Y. Nagano (eds)  
2000 *New horizons in Bon studies* (Senri ethnological reports 15). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kansakar, T. R.  
1999 Verb agreement in Classical Newar and Modern Newar. In Y. P. Yadava and W. W. Glover (eds) *Topics in Nepalese linguistics*, pp. 421-443. Kathmandu: Royal Nepal Academy.
- 加藤昌彦  
(To appear) A preliminary report on Spiti phonemes. In Y. Nagano and R. J. LaPolla (eds) *A linguistic approach to the Zhangshung language and its related languages in the Indian Himalayas*. Osaka: National Museum of Ethnology.
- LaPolla, R. J.  
1994 Parallel grammaticalizations in Tibeto-Burman languages. *LTBA* 17(1), 61-80.
- Masica, C. P.  
1976 *Defining a linguistic area*. Chicago and London: The University of Chicago Press.  
1991 *The Indo-Aryan languages*. Cambridge, New York and Melbourne: Cambridge University Press.
- Michailovsky, B.  
1981 *Grammaire de la langue Hayu*. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.  
1988 *La langue Hayu*. Paris: Centre National de la Recherche Scientifique.
- 長野泰彦  
1980 A preliminary report of the three Tibetan dialects in the northern Gandaki valley. *Anthropological and linguistic studies of the Gandaki area in Nepal* (Monumenta Serindica 10), pp. 81-157. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.  
1982 A Manang glossary. *Anthropological and linguistic studies of the Gandaki area in Nepal* (Monumenta Serindica 12), pp. 203-234. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.  
1986 A checklist of Newari ergativity. *Anthropological and linguistic studies of the Gandaki area in Nepal* (Monumenta Serindica 15), pp. 167-168. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.  
1999 『チベット文化域におけるボン教文化の研究』(国際学術研究:研究成果報告書)大阪:国立民族学博物館。
- Nagano, Y. and R. J. LaPolla (eds)  
(To appear) *A linguistic approach to the Zhangshung language and its related languages in the Indian Himalayas*. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 名和克郎  
1999 『もう一つの〈近代〉の布置—ネパール, ビャンスおよび周辺地域における儀礼と社会範疇に関する民族誌的研究』東京大学博士論文。  
2000 「多言語状況下における言語名と指示対象—ネパール, ビャンスの事例から」東京大学多言語社会研究会発表論文。
- 西 義郎  
1979 「ネパールのチベット語方言について—Kagate 語, Sherpa 語, Jirel 語, Lhomi 語」『YAK』3, 1-26, 東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所  
1982 Five Swadesh 100-word lists of Ghale. *Anthropological and linguistic studies of the Gandaki area in Nepal* (Monumenta Serindica 10), pp. 158-194. Tokyo: Institute for the Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.  
1983a A brief survey of the linguistic position of Ghale. 『愛媛大学法文学部論集(文科編)』16, 27-50.  
1983b Classification of some Tibetan dialects of Nepal. 『愛媛大学法文学部論集(文科編)』16, 51-70.  
1986 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11(4), 837-900.  
1989a 「チェパン語」『三省堂言語学大辞典』第2巻, pp. 715b-721b, 東京:三省堂。

- 1989b 「チベット語」『三省堂言語学大辞典』第2巻, pp. 783a-788b, 東京:三省堂。  
 1989c 「トゥルン語」『三省堂言語学大辞典』第2巻, pp. 1269a-1278b, 東京:三省堂。  
 1990 「ヒマラヤ諸語の分布と分類・上」『国立民族学博物館研究報告』15(1), 265-337。  
 1991 「ヒマラヤ諸語の分布と分類・中」『国立民族学博物館研究報告』16(1), 31-153。  
 1992a 「ハユ語」『三省堂言語学大辞典』第3巻, pp. 253a-269a, 東京:三省堂。  
 1992b 「パンタワ語」『三省堂言語学大辞典』第3巻, pp. 380a-391a, 東京:三省堂。  
 1992c 「ヒマラヤ語系」『三省堂言語学大辞典』第3巻, pp. 495a-505b, 東京:三省堂。  
 1992d 「ヒマラヤ諸語」『三省堂言語学大辞典』第3巻, pp. 505b-552a, 東京:三省堂。  
 1992e 「マガル語」『三省堂言語学大辞典』第4巻, pp. 28a-40b, 東京:三省堂。  
 1992f 「マナン語」『三省堂言語学大辞典』第4巻, pp. 103b-111a, 東京:三省堂。  
 1992g 「マンチャト語」『三省堂言語学大辞典』第4巻, pp. 211a-216b, 東京:三省堂。  
 1992h 「ランバ語」『三省堂言語学大辞典』第4巻, pp. 722b-730a, 東京:三省堂。  
 1992i A survey of the present state of our knowledge about the Himalayan languages. 国際漢蔵学会 (Univ. of California, Berkeley) 配布論文。  
 1993a 「カナウル語」『三省堂言語学大辞典』第4巻, pp. 55b-86b, 東京:三省堂。  
 1993b 「グルン語」『三省堂言語学大辞典』第5巻, pp. 135b-143b, 東京:三省堂。  
 1993c 「リンブ語」『三省堂言語学大辞典』第5巻, pp. 418a-447b, 東京:三省堂。  
 1995 A brief survey of the controversy in verb pronominalization in Tibeto-Burman. In Y. Nishi, J. A. Matisoff and Y. Nagano (eds) *New horizons in Tibeto-Burman morphology* (Senri ethnological studies 41), pp. 1-16. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Noonan, M.  
 1999 *Chantyal dictionary and texts*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Romaine, S.  
 1994 *Language in society—An introduction to sociolinguistics*. Oxford, et al.: Oxford Univ. Press. (『社会のなかの言語』土田滋・高橋留美訳, 東京:三省堂, 1994)
- Saxena, A.  
 1992 Finite verb morphology in Tibeto-Kinnari. Ph. D. dissertation, University of Oregon.  
 1997 Toward a reconstruction of the Proto West Himalayish agreement system. In D. Bradley (ed.) *Tibeto-Burman languages of the Himalayas (Papers in Southeast Asian linguistics 14)* (Pacific linguistics, Series A-86), pp. 73-94.
- 高橋慶治  
 1999 「キナウル語の記述的研究」『ボン教文化域におけるボン教文化の研究』(国際学術研究: 研究成果報告書) 大阪: 国立民族学博物館
- Toba, T. (鳥羽季義) (ed.)  
 1998 *A bibliography of Nepalese languages and linguistics*. Kathmandu: Central Department of Linguistics, Tribhuvan University.
- Trivedi, G. M.  
 1991 *Descriptive grammar of Byansi*. Calcutta: Anthropological Survey of India.
- Vinding, M.  
 1998 *The Thakali—the Himalayan ethnology*. London: Serindia.
- Volkart, M.  
 1999 Types of compounds in Written Tibetan. *Themes in Himalayan languages and linguistics* (Proceedings of the 5th Himalayan Languages Symposium, Kathmandu).  
 (To appear) The meaning of the auxiliary morpheme 'dug in the context of the aspect system of some Central Tibetan dialects: A comparison. *LTBA*.
- Weidert, A. and B. Subba  
 1985 *Concise Limbu grammar and dictionary*. Amsterdam: Lobster Publications.
- Yadava, Y. P.  
 1999 Report (Nepal). In R. Singh (ed.) *The yearbook of South Asian languages and linguistics*, pp. 198-209. New Delhi, Thousand Oaks and London: Sage Publications.
- Yadava, Y. P. and T. R. Kansakar  
 1998 *Lexicography in Nepal*. Kathmandu: Royal Nepal Academy.

西 ヒマラヤ地域のチベット・ビルマ系言語研究の動向

Yadava, Y. P. and Warren W. Glover (eds)

1999 *Topics in Nepalese linguistics*. Kathmandu: Royal Nepal Academy.

Zoller, C. P.

1983 *Die Sprache der Rang Pas von Garhwal*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.